

平成21年12月7日(月)

静岡新聞

住民の満足度高めたい



ユニバーサルデザイン(UD)をテーマにした国際会議「国際UD会議2010」浜松開催まで1年を切った。4、5日には浜松市内でイベントが開かれ、ものづくりまちづくりの可能性を探った。住民の認識、満足の度合いを引き上げ開催に臨みたい。

UDは米国の建築家ロナルド・メイヌ氏が1980年代に提唱、「バリアフリー」を一歩進めて誰もが使いやすい製品、まち、環境をデザインしていく」といふ考え

方だ。県はこの考え方を、全国で初めて99年度から県政の基本的な考え方に位置づけ推進してきた。年齢、性別、能力、言語など互いの特性や違いを理解し尊重し合い、誰もが暮らしやすい空間づくりを目指し、行動計画も3期目に入っている。

10年が経過し、ハード面では歩道の幅、段差、傾斜の改善、エレベーターや案内看板の設置など、移動しやすい動線の確保が進んだ。公共施設への導入も広がり、富士山こども園の傾斜の緩い園路、県立総合病院の五感に訴える案内サインといっように、身近な所に浸透してきている。

産業分野では自動車メーカーが使いやすいシフトレバーを開発すれば、デパートやスーパー、ホテルといった商業施設でもUD仕様トイレ、高齢者や障害者のための駐車スペース、歩行誘導ブロックなどの整備が進む。

毎年実施しているデザインコンクールも若い世代が周囲のニーズを探る好機となっている。本年度は1500点余の応募があり、大賞は、時刻を香りでも知らせる目と耳と鼻の時計(小学生の

部)、歩行者も運転者も見やすい光線の信号機(中学生の部)、レバー一つで操作するラジオ(一般の部)と大胆な発想と気配りが光った。

一方で県民のUDの認識率は7割程度にとどまり、満足度も約4割と伸び悩んでいる。ペピーカーを使う子育て世代、トイレに介助が必要な高齢者など当事者が直面する不便さに、行政や企業が真剣に向き合わなければ向上は難しい。住民の提案や声を素早く施策

に反映する仕組みも必要だ。高齢者と若者、障害のある人とない人などで、要望が異なる事態も出てくるだろう。調整には、地域をよく知るNPOなど住民の力も求められる。困っている人に声をかけ手を貸す「心のUD」の育成も、これまでに以上進めてほしい。

来年初の国際会議には30カ国から研究者や企業、市民1万2千人が集う。長寿社会に向けたビジネスチャンスでもある。